

「新学務主任に就任して」



学務主任 鈴木重晴(脳神経外科教授)

学務委員になりますと、余地なく関与しなければならないなり、多くの事を知らなくなり、多くの事を知るようになります。その観点からしますと、教授就任後には、可及的早期に本委員を経験する方が意義が深く、以後の教育活動がより充実したものになるかと思われます。ただ、六年間である委員任期の五年目になりますとエスカレーター式に入試専門委員長となり、六年目には同様に学務主任となるシステムに多少頗り難いところがあります。それは、「教育」の比重が高い「大学」において、極めて重要度の高い学務関係の仕事を担う委員会の長(主任)が、長として勤め、諸問題その座を去ってしまうという点であります。決して委員となつた人を磨くための委員会ではなく、学内の教育面の問題に対処し、より良くするための委員会でありますので、少なくとも主任“は種々のノウハウに精通した人が、選ばれて、数年間は勤める方が良いのではないかと考えたりも致します。勿論、適材適所の考慮も必要かとは思いますが

無かつたこと等々に選択の学内でのそれまで全然知らなかつたこと、あまり興味の無かつたこと等々に選択の学務委員になりますと、余地なく関与しなければならないなり、多くの事を知るようになります。その観点からしますと、教授就任後には、可及的早期に本委員を経験する方が意義が深く、以後の教育活動がより充実したものになるかと思われます。ただ、六年間である委員任期の五年目になりますとエスカレーター式に入試専門委員長となり、六年目には同様に学務主任となるシステムに多少頗り難いところがあります。それは、「教育」の比重が高い「大学」において、極めて重要度の高い学務関係の仕事を担う委員会の長(主任)が、長として勤め、諸問題その座を去ってしまうといふことがあります。決して委員となつた人を磨くための委員会ではなく、学内の教育面の問題に対処し、より良くするための委員会でありますので、少なくとも主任“は種々のノウハウに精通した人が、選ばれて、数年間は勤める方が良いのではないかと考えたりも致します。勿論、適材適所の考慮も必要かとは思いますが

インフォームド・コンセン

が、教官が分担して構成する委員会の一つでもありますので、全教授が有資格者という点は絶対でしょう。

自身は、委員五年目の昨年度、至らぬながらも入試専門委員長を勤め、それ以前には割り振られた役割の大学の入学試験の実態に可なり触れ得たような思い過入れる事になり、お陰様で入れる事になり、お陰様でごしもしています。その流れで新学期から本稿の主題である“学務主任”となりましたが、就任早々、嘗ては想像すら及ばぬような問題の処理に関わり、面食らい気味であると同時に、適任ではないことを充々自覚は致しておりますが、幾分でも役立つよう勤められればと思つてはおります。

最近の斯界を見ますと、

大学自体の在り方、病院経営、診療体制、教育活動その他のあらゆる面で改革が求められ、各種委員会においても常に複雑な問題が討議され、各委員には本業である研究や診療に割く時間が減らる程の役割が担わされておりますが、如何に遠因がバブル崩壊にあるとはいえ、それが現代の大学教育の義務である以上、やはり遂行するための努力は払うべきなのでしょう。

医療の世界において以前は、医師を含めた医療側が患者さんに対して思いやりを欠いた横柄な態度をとる傾向があつたとして、近年その反省が叫ばれ、充分な

考

慮

も必要かとは思いますが

トを主体として緊密な関係を保ち、愛護的に接すべきという気運があります。病に冒された立場の人々の苦しみは、医療側の人間であつても人生は有限でありますので殆どの人が必ず味わうものであり、当然の反省であることは充分理解できることに起因しています。

運の普遍化は企業や商業の世界でも目立ちますが、殿様商売では顧客は離れるのが当たり前ですからこの場合も、医師にとつても厳しい日々が待ち受けております。

マリアンナ医科大学免疫学・病害動物学教授に就任いたしました。

昭和五十六年卒業の鈴木登と申します。このたび平成十四年一月一日付けて聖マリアンナ医科大学免疫学・病害動物学教授に就任いたしました。

昭和五十六年四月

虎の門病院内科病棟医

昭和五十八年四月

島根医科大学大学院入学

昭和五十九年三月

弘前大学医学部卒業

昭和五十九年四月

昭和五十九年五月

昭和五十九年六月

昭和五十九年七月

昭和五十九年八月

昭和五十九年九月

昭和五十九年十月

昭和五十九年十一月

昭和五十九年十二月

昭和五十九年一月

昭和五十九年二月

昭和五十九年三月

昭和五十九年四月

昭和五十九年五月

昭和五十九年六月

昭和五十九年七月

昭和五十九年八月

昭和五十九年九月

昭和五十九年十月

昭和五十九年十一月

昭和五十九年十二月

昭和五十九年一月

昭和五十九年二月

昭和五十九年三月

昭和五十九年四月

昭和五十九年五月

昭和五十九年六月

昭和五十九年七月

昭和五十九年八月

昭和五十九年九月

昭和五十九年十月

昭和五十九年十一月

昭和五十九年十二月

昭和五十九年一月

昭和五十九年二月

昭和五十九年三月

昭和五十九年四月

昭和五十九年五月

昭和五十九年六月

昭和五十九年七月

昭和五十九年八月

昭和五十九年九月

昭和五十九年十月

昭和五十九年十一月

昭和五十九年十二月

昭和五十九年一月

昭和五十九年二月

昭和五十九年三月

昭和五十九年四月

昭和五十九年五月

昭和五十九年六月

昭和五十九年七月

昭和五十九年八月

昭和五十九年九月

昭和五十九年十月

昭和五十九年十一月

昭和五十九年十二月

昭和五十九年一月

昭和五十九年二月

昭和五十九年三月

昭和五十九年四月

昭和五十九年五月

昭和五十九年六月

昭和五十九年七月

昭和五十九年八月

昭和五十九年九月

昭和五十九年十月

昭和五十九年十一月

昭和五十九年十二月

昭和五十九年一月

昭和五十九年二月

昭和五十九年三月

昭和五十九年四月

昭和五十九年五月

昭和五十九年六月

昭和五十九年七月

昭和五十九年八月

昭和五十九年九月

昭和五十九年十月

昭和五十九年十一月

昭和五十九年十二月

昭和五十九年一月

昭和五十九年二月

昭和五十九年三月

昭和五十九年四月

昭和五十九年五月

昭和五十九年六月

昭和五十九年七月

昭和五十九年八月

昭和五十九年九月

昭和五十九年十月

昭和五十九年十一月

昭和五十九年十二月

昭和五十九年一月

昭和五十九年二月

昭和五十九年三月

昭和五十九年四月

昭和五十九年五月

昭和五十九年六月

昭和五十九年七月

昭和五十九年八月

昭和五十九年九月

昭和五十九年十月

昭和五十九年十一月

昭和五十九年十二月

昭和五十九年一月

昭和五十九年二月

昭和五十九年三月

昭和五十九年四月

昭和五十九年五月

昭和五十九年六月

昭和五十九年七月

昭和五十九年八月

昭和五十九年九月

昭和五十九年十月

昭和五十九年十一月

昭和五十九年十二月

昭和五十九年一月

昭和五十九年二月

昭和五十九年三月

昭和五十九年四月

昭和五十九年五月

昭和五十九年六月

昭和五十九年七月

昭和五十九年八月

昭和五十九年九月

昭和五十九年十月

昭和五十九年十一月

昭和五十九年十二月

昭和五十九年一月

昭和五十九年二月

昭和五十九年三月

昭和五十九年四月

昭和五十九年五月

昭和五十九年六月

昭和五十九年七月

昭和五十九年八月

昭和五十九年九月

昭和五十九年十月

昭和五十九年十一月

昭和五十九年十二月

昭和五十九年一月

昭和五十九年二月

昭和五十九年三月

『師資の情』

麻醉科学講座教授 松木明知

二月八日にNHK仙台放送局の山本和之チーフアナウンサーをお招きして、医学部臨床大講堂で、人前で上手に話をするためにどのようにしたらよいかについて、講演して戴いた。予想した以上に聴衆が多く、内容も大変良かつたのではないかと思う。

この企画は医学部のフェカルティ・ディベロップメントの一環として行われたのであるが、教育スタッフの中には、未だフェカルティ・ディベロップメントが何物であるのかを理解していない方が時として見受けられる。

理解され難い理由の過半は、カタカナ語のためである。日本人の多くは江戸時代末期からの舶来主義に毒されているので、カタカナ語にすればどんなものでも、最上で、新鮮と思い込んでしまう。フェカルティ・ディ

ベロップメントもその一つで、この言葉を唱えていればただ何となくはるかかなにあら。何かいいもの“が手に入るよう錯覚しているのではないだろうか。

フエカルティ・ディベロップメントは種々の語義を有するが、われわれの分野では、端的に表現すれば教育者としての能力を開発向上させることである。専門領域の知識、技術も大切であるが、人間性の陶冶の意味も込められていることはもちろんである。

カタカナ語のフエカルティ・ディベロップメントにすれば、何となく曖昧な雰囲気が漂うようでびんとこないが、中国語の「師資發展」とすれば少し理解しやすいと思う。フエカルティを「師資」、ディベロップメントを「發展」と訳したのである。

教育、指導者、リーダーを意味する。余談になるが、古代中国にライオンの情報が入った時、中国ではライオンを表す言葉がなかった。そこで中国人は中世（言語学上の中世）ペルシヤ語でライオンを意味するシェールの「シエ」という音を生かし、加えて獸のリーダー「師」の意味で「王」と「師」を組み合わせて「獅」という字を作ったのである。洵に巧みな造字である。

資とは能力、とくに潜在する能力のことである。潜在した能力であるから開発しなければならないのである。

このように記すと、中国でも師資という言葉は最近造語されたと思うかも知れない。しかし流石中国である。四三二年に成立した汨羅（はんよう）の「後漢書」のある人物伝の中に次のよくな言葉がある。

「グリコシダーゼが切り開く新領域の科学」、第二部「糖鎖を用いた医学、生物学への挑戦」という構成で、国際的に活躍し、ポストゲノムの現在、益々の発展が期待されている研究者によって十三題の講演が行われた。

正樹先生（東医歯大）の「エンドグリコシダーゼによるヘパラン硫酸の代謝調節」から成る第一部では、主に自らがエンド型グリコシダーゼの発見者である研究者により、糖鎖工学的研究の開拓および発展について紹介された。

ノグリカン鎖付加の
ズム・EXT癌抑制製剤
ファミリーと新規コ-
パク質合成酵素遺伝子
ミリー」から成る第
二部では、糖鎖化合
物の化学合成と治療
への応用や、病態と
糖鎖あるいは糖鎖関
連酵素との関わり等
についての最新の研
究成果が紹介され
た。学部、研究領域
の異なる参加者によ
つて活発な討論が行
われ、時間が足りない
程であった。遠藤
先生縁りの全国各地
から集まつた百名程
の参加者は、思い出
に残るエキサイティ
ングな時間を共有で
きて感激していた。
百七十名が参加し
た記念祝賀会では、
新川秀一教授率いる
弘前大学医学部管弦

A black and white poster for a symposium. The background features a silhouette of a cherry blossom tree against a bright sky. At the top, Japanese text reads "遠藤正彦教授退官記念シンポジウム". Below it, a large title "21世紀を切り開く循環器科学" is displayed in a stylized font. In the center, event details are provided: "日 時 平成14年4月27日(土) 9:00~16:45 (受付8:30~)" and "場 所 弘前大学医学部コミュニケーションセンター". At the bottom, it says "参加費 無料".

ヤマイカにおける医学教育および保健医療の向上のため、本学との関係継続に大きな期待を寄せている。本学部としてもこれまでの多年の交流の経緯があるとともに、英語圏における個性ある大学としての西インド大学医学部が国際交流締結先となることにより、医療のみならず研究や学生など広範な領域での交流が期待される。最後に、本締結の推進にあたられた菅原医学部長、および締結の労をとつていただいた三田教授・中路助教授に紙面を借りて御礼申し上げたい。（蔵田記）

平成十四年度弘前大学医学部動物慰靈祭が五月二十日午後一時三十分から医学部基礎講堂において執り行われた。まず、菅原医学

部長による祭祀の後、
神谷実験動物施設長、
鈴木附属病院長ら教職
員、学生の献花により
この一年の間に実験な

祭祀を読み上げる医学部長

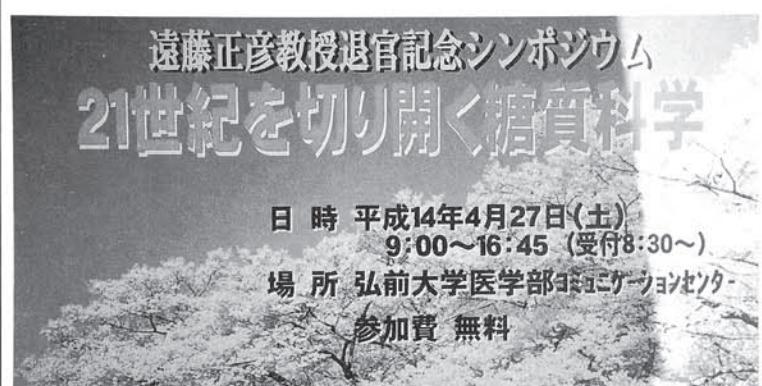
「二十一世紀を切り開く糖質科学」というテーマの下、遠藤正彦教授退官記念シンポジウムが四月二十七日（土）、弘前大学医学部コミニケーションセンターにおいて開催された。未開拓のこの領域の研究を弘前の一地で開花させた正にバイオニアである遠藤先生の教授退官記念に相応しいテーマである。例年であれば弘前公園の桜が満開の時期であるが、今年は既にりんごの花が咲くという暖かさであった。記念すべきその日は雲ひとつない清々しい青空であつた。

生（京大院）の「エンドグリコシダーゼを用いた生理活性糖ペプチドの合成」、伊東信先生（九大院）の「エンドグリコセラミダーゼとセラミダーゼの分子進化」、長谷純宏先生（阪大院）の「エンドグリコシダーゼの発見・精製・性質」、竹川薰先生（香川大）の「なぜエンド

執り行われるが

遠藤正彦教授退官記念シンポジウム● 「二十一世紀を切り開く糖質科学」

(前ページより)
による現地視察・研修を行
つてきた実績がある。



卒業記念謝恩会



主催の卒業記念謝恩会が開催された。卒業生はその数日前に医師国家試験を受験したばかりであり、まだその興奮や余韻から抜けきれない模様ではあったが、無事医学部を卒業したという開放感からか、学生生活の最後を名残惜しみながらも新しい門出に希望で胸をふつたところ、おびただしい数の医学部生が学生と教授らが挨拶とともに二次会へと散会した。卒業生が学生から社会人へと少なくとも外見上変化しつつあることを告げるひとときであった。今後の彼らの活躍と名実共に日本の医学、医療の礎となつて行くことを期待したい。

(中沢 記)

去る三月二十二日、弘前大学みちのくホールに於いて平成十三年度の弘前大学卒業式が肃々と執り行われ、一〇七名の医学部生はめでたく六年間の学業生活に終止符を打つこととなつた。

同日夕刻、ホテルニュー キヤッスルに於いて卒業生

が開催された。卒業生はその数日前に医師国家試験を受験したばかりであり、まだその興奮や余韻から抜けきれないので、卒業生たちが医学部一年生として入学してきたことで特に色々な経験を共にしてきた学年であつたことと、学部長時代に学生自習室を深夜あるいは早朝覗いてみたところ、おびただしい数

がかつて医学部長に就任して一年目にちょうど今回の卒業生たちが医学部一年生として入学してきたことで特に色々な経験を共にしてきた学年であつたことと、家試験は間違いなく全員合格であろう」と思われたことが述べられた。次いで菅原医学部長は昨年までの南

塘大明神遠藤宮司に代わって、太宰府天満宮菅原道公の末裔に変身して「今、心の中で願うことは何でも叶うであろう」という有り難いお告げを述べられた。

最後に鈴木病院長は「最近は研修医がミスを犯しても先輩医師はあまりかばつてくれないので十分注意するよう」。ただし弘前大学ではその点でも十分指導するのでもし外へ出て途中で弘前に帰りたくなつても丈夫、いつでも帰ってきて下さい」と時勢柄リスクマネジメントの立場から卒業生に温かくかつ心強いお祝いの言葉が述べられた。

その後、学生と教授らが今年の国家試験の感想や今後の進路そして思い出話などに話の華が咲き、しばし時間のたつのも忘れ閉会の挨拶とともに二次会へと散会した。卒業生が学生から社会人へと少なくとも外見上変化しつつあることを告げるひとときであった。今後の彼らの活躍と名実共に日本の医学、医療の礎となつて行くことを期待したい。

くらませていた様子であつた。会場はりりしい姿の男子学生やあでやかな衣装の女子学生があふれるきらびやかな雰囲気で、多数の来賓教授に加えて遠藤学長も臨席され、記念写真撮影に引き続き和やかな宴が始まつた。

遠藤学長の挨拶は、学長がかつて医学部長に就任して一年目にちょうど今回の卒業生たちが医学部一年生として入学してきたことで特に色々な経験を共にしてきた学年であつたことと、家試験は間違いなく全員合格であろう」と思われたことが述べられた。次いで菅原医学部長は昨年までの南塘大明神遠藤宮司に代わって、太宰府天満宮菅原道公の末裔に変身して「今、心の中で願うことは何でも叶うであろう」という有り難いお告げを述べられた。

最後に鈴木病院長は「最近は研修医がミスを犯しても先輩医師はあまりかばつてくれないので十分注意するよう」。ただし弘前大学ではその点でも十分指導するのでもし外へ出て途中で弘前に帰りたくなつても丈夫、いつでも帰ってきて下さい」と時勢柄リスクマネジメントの立場から卒業生に温かくかつ心強いお祝いの言葉が述べられた。

その後、学生と教授らが

今年の新入生は来年度か

ら学士編入学が実施される

ため八十一名（私費外国人

留学生一名を含む）であつた。男女比は五十四対二十

七、青森県からは十七名、

東北五県から十二名、北海

道から六名が入学。さらに、

関東、中部、関西、中国、九州

を含む広い地域から人材が集まつた。

これらの新入生を迎えるため八十一名から一〇四名と大幅に増加した。

これらの方々の進路とし

て青森県に残つたのは四十

六名（四十四%）であり、

昨年度の四十二%とほぼ同

率であった。また青森県以

外の東北・北海道地方が十

が多かつたこともあり昨年

の八十一名から一〇四名と大幅に増加した。

これらの方々の進路とし

て青森県に残つたのは四十

六名（四十四%）であり、

(前ページより)
いるが、医学部本町地区では未だである。行き違いがあつたようで至急対応中である。この医学部ウォーカーを手にする頃には本町地区からも可能になつてゐる筈である。

購入図書

医学部図書館では医学科文部科学省配分経費はほぼ全額を学生用図書経費としている。配分経費は本年度減額だが、なんとか昨年までと同様に学生自主選定図書を維持確保したい。学友会を通して選定を依頼してきたが本年も踏襲する。学生あたり購入図書はこの医学科では一・〇一である。日本の現状は一以上のところはそんなにない。



「松木文庫」

■特別展示会

会一同、心から願っている

いただけると有り難い。また、各講座・部門の展示紹介など展示室の活用をお考えの方はご連絡いただきたい。

学生も教職員も、目的もなく、ぶらつと訪れるような図書館でもありたい。医学部図書館では、その壁面を利用して図書館の大きさの割には多い絵画を掲げている。図書館絵画案内と一緒に紹介しているので是非本

国書館員の多くは時間とエネルギーが学外のため費やされている。国立医学図書館構想はあるが、まだ口だけの現状である。

ります。医学部図書館は、それを滅多にないチャンスと積極的にとらえます。この図書館便りの全体をお読みいただいたとき、意をご理解いただけるものと信じています。もうその渦中といつてもよいでしょう。図書館も無論枠外ではあります。医学部図書館が、

コラム
医学部
こぼれ話：

■展示室利用拡大

研所長加藤四郎先生の講演会を持つと準備をすすめている。いずれの展示小会も、勿論、公開である。

各図書館間では相互に支援体制をもつてゐる。I.L.S.と図書館用語でいふてゐるシステムである。要するに、主に文献について頼んだり頼まれたりの組織である。どこの図書館でも雑誌削減

時々当医学部に入学してくる。A教授の子弟がめでたく合格し、そして卒業した。その卒業式の日、学内の廊下でA教授に向かってB事務官「先生の息子さん、ご卒業おめでとうございます。先生の息子さんは良いお医者さんになりますね、先生の息子さんは、先生より良い性格してますからね。」

に向かって「君！うるさい！」君は医者に向かない、父親は先生に向かない。大学をやめろ、そのような教育をした親の顔が嫌だ。後日県人会で、酒を注ぎにきた学生、低い声で「先生、先日怒つた学生はあそこに座っています。先生が顔を見るといつて、見たいと言ったあいつの父親は先生の隣に座つている○○大教授ですよ。」

すすめているのが反映し、雑誌や図書をもつと有効用で見るところからある。

「桜
散る」

朝倉
洋



絵は自由に楽しむのがよい。見る人、それぞれが違つていてよい。それが多様であればあるほど、多分、画人はニコニコと思う。来館される皆に楽しんでいただきたい、早かつた今年の桜をもう一度と思われる方も。

お詫び 前回の
本シリーズで紹
介した書「展示
室」の祐川愛子
さんの号は「高
木中琴」です。本
字の集合を扱っ
ている図書館と
して不注意の限
りでした。訂正
させていただきま
す。

人事異動

内科学第一 助手
岩佐 篤

定年 (14・4・1)
木村 正方
臨床検査医学 助教授

衛生学 助手
吉田 一弘

第一内科 講師
對馬 健一(国保黒石病院)

昇任 (14・4・1)
高橋 徹
周産母子センター副部長

第二内科 助手
森 康宏(青森労災病院)

編集後記

●医学部医学科
辞職 (14・3・31)
外科学第二 助教授
鈴木英登士(鶴田町立中央病院副院長)

内科学第二 助手
前田 哲也(板柳中央病院)

併任 (14・4・1)
木村 正方
臨床検査医学 助教授

老年科学 助手
浦田 幸朋

整形外科 講師
植山 和正(弘前記念病院)

第一内科 講師
佐々木賀広(附属病院助手)

第二内科 助手
吉町 文暢(青森厚生病院)

この四月から「大学の教育研究情勢に関する懇話会(いわゆる学長懇話会)」のメンバーの一人となり、他学部の委員も交え毎月に二回、学長室で自由な議論に加えさせていただいている。問題はいくらでもあるといふ感じである。全国的に学生の意欲や学力の低下が叫ばれて久しいが、もしそれが事実ならその対応は急務である。一方、問題は教官の側にも全く無いとは言えまい。昨年度から医学科で導入した「教員任期制」や「学生による教育評価」は教官の意識改革を促し、よりよい教育を行なうためのものであろう。このような制度を全国に先駆けて実施したこととは胸の張ることである。

年寄りは時代を写す鏡であるという。若者は教育スタッフの姿に自分の将来像を見ている。学生が自分をどのように見ているか、そつと聞いてみるとのもいかもしれない。独立行政法人化が悪いとは思わない。これを契機に、今まで固定化していた制度、適切な評価方法と結果の公表、大学では重要視しなかつた価値観などの見直しが図られるべきだろう。

今年はサッカーのワールドカップの年。八年前、米国留学中にスタンンドで体験した熱狂が忘れられない。FIFAの加盟国は国連の加盟国よりも多い(FIFA A二〇四、国連一八九)。それは国の威信をかけた戦いである。各学部、各大学の威信をかけた戦いは既に始まっている。(若林記)

●医学部医学科
辞職 (14・3・31)
眼科学
鈴木英昭(鶴田町立中央病院副院長)

内科学第二 講師
花田裕之(青森市民病院)

外科学第一 助手
高橋 昌一(福島県立医科大学助手)

整形外科 助手
藤田 紀生(青森県立中央病院)

眼科 講師
西川 真史(むつ総合病院)

第一内科 講師
鈴木 幸彦(附属病院助手)

第二内科 助手
菅原 俊之(医員)

この四月から「大学の教育研究情勢に関する懇話会(いわゆる学長懇話会)」のメンバーの一人となり、他学部の委員も交え毎月に二回、学長室で自由な議論に加えさせていただいている。問題はいくらでもあるといふ感じである。全国的に学生の意欲や学力の低下が叫ばれて久しいが、もしそれが事実ならその対応は急務である。一方、問題は教官の側にも全く無いとは言えまい。昨年度から医学科で導入した「教員任期制」や「学生による教育評価」は教官の意識改革を促し、よりよい教育を行なうためのものであろう。このような制度を全国に先駆けて実施したこととは胸の張ることである。

年寄りは時代を写す鏡であるという。若者は教育スタッフの姿に自分の将来像を見ている。学生が自分をどのように見ているか、そつと聞いてみるとのもいかもしれない。独立行政法人化が悪いとは思わない。これを契機に、今まで固定化していた制度、適切な評価方法と結果の公表、大学では重要視しなかつた価値観などの見直しが図られるべきだろう。

今年はサッカーのワールドカップの年。八年前、米国留学中にスタンンドで体験した熱狂が忘れられない。FIFAの加盟国は国連の加盟国よりも多い(FIFA A二〇四、国連一八九)。それは国の威信をかけた戦いである。各学部、各大学の威信をかけた戦いは既に始まっている。(若林記)

●医学部医学科
辞職 (14・3・31)
外科学第二 助手
遠藤 哲(西北中央病院)

解剖学第二 助手
鈴木 礼子(朝日大学歯学部助手)

放射線医学 助手
近藤 英宏(医員)

整形外科 助手
佐々木真吾(医員)

臨床検査医学 助手
西川 真史(むつ総合病院)

第一内科 講師
鈴木 幸彦(附属病院助手)

第二内科 助手
菅原 俊之(医員)

この四月から「大学の教育研究情勢に関する懇話会(いわゆる学長懇話会)」のメンバーの一人となり、他学部の委員も交え毎月に二回、学長室で自由な議論に加えさせていただいている。問題はいくらでもあるといふ感じである。全国的に学生の意欲や学力の低下が叫ばれて久しいが、もしそれが事実ならその対応は急務である。一方、問題は教官の側にも全く無いとは言えまい。昨年度から医学科で導入した「教員任期制」や「学生による教育評価」は教官の意識改革を促し、よりよい教育を行なうためのものであろう。このような制度を全国に先駆けて実施したこととは胸の張ることである。

年寄りは時代を写す鏡であるという。若者は教育スタッフの姿に自分の将来像を見ている。学生が自分をどのように見ているか、そつと聞いてみるとのもいかもしれない。独立行政法人化が悪いとは思わない。これを契機に、今まで固定化していた制度、適切な評価方法と結果の公表、大学では重要視しなかつた価値観などの見直しが図られるべきだろう。

今年はサッカーのワールドカップの年。八年前、米国留学中にスタンンドで体験した熱狂が忘れない。FIFAの加盟国は国連の加盟国よりも多い(FIFA A二〇四、国連一八九)。それは国の威信をかけた戦いである。各学部、各大学の威信をかけた戦いは既に始まっている。(若林記)

●医学部医学科
辞職 (14・3・31)
内科学第二 助手
鎌田 孝篤(西北中央病院)

衛生学 助手
遠藤 哲(西北中央病院)

麻酔学 助手
鈴木 哲也(医員)

整形外科 助手
佐々木真吾(医員)

臨床検査医学 助手
西川 真史(むつ総合病院)

第一内科 講師
鈴木 幸彦(附属病院助手)

第二内科 助手
菅原 俊之(医員)

この四月から「大学の教育研究情勢に関する懇話会(いわゆる学長懇話会)」のメンバーの一人となり、他学部の委員も交え毎月に二回、学長室で自由な議論に加えさせていただいている。問題はいくらでもあるといふ感じである。全国的に学生の意欲や学力の低下が叫ばれて久しいが、もしそれが事実ならその対応は急務である。一方、問題は教官の側にも全く無いとは言えまい。昨年度から医学科で導入した「教員任期制」や「学生による教育評価」は教官の意識改革を促し、よりよい教育を行なうためのものであろう。このような制度を全国に先駆けて実施したこととは胸の張ることである。

●医学部医学科
辞職 (14・3・31)
内科学第二 講師
高橋 昌一(福島県立医科大学助手)

外科学第一 助手
近藤 英宏(医員)

放射線医学 助手
鈴木 哲也(医員)

整形外科 助手
佐々木真吾(医員)

臨床検査医学 助手
西川 真史(むつ総合病院)

第一内科 講師
鈴木 幸彦(附属病院助手)

第二内科 助手
菅原 俊之(医員)

この四月から「大学の教育研究情勢に関する懇話会(いわゆる学長懇話会)」のメンバーの一人となり、他学部の委員も交え毎月に二回、学長室で自由な議論に加えさせていただいている。問題はいくらでもあるといふ感じである。全国的に学生の意欲や学力の低下が叫ばれて久しいが、もしそれが事実ならその対応は急務である。一方、問題は教官の側にも全く無いとは言えまい。昨年度から医学科で導入した「教員任期制」や「学生による教育評価」は教官の意識改革を促し、よりよい教育を行なうためのものであろう。このような制度を全国に先駆けて実施したこととは胸の張ることである。

●医学部医学科
辞職 (14・3・31)
内科学第二 講師
大黒 徹(附属病院講師)

眼科学 助教授
高橋 和郎(北海道大学教授)

細胞工学部門 教授
長嶋 和郎(北海道大学教授)

衛生学 助手
大黒 徹(附属病院講師)

臨床検査医学 助手
大黒 徹(附属病院講師)

第一内科 講師
大黒 徹(附属病院講師)

第二内科 助手
大黒 徹(附属病院講師)

この四月から「大学の教育研究情勢に関する懇話会(いわゆる学長懇話会)」のメンバーの一人となり、他学部の委員も交え毎月に二回、学長室で自由な議論に加えさせていただいている。問題はいくらでもあるといふ感じである。全国的に学生の意欲や学力の低下が叫ばれて久しいが、もしそれが事実ならその対応は急務である。一方、問題は教官の側にも全く無いとは言えまい。昨年度から医学科で導入した「教員任期制」や「学生による教育評価」は教官の意識改革を促し、よりよい教育を行なうためのものであろう。このような制度を全国に先駆けて実施したこととは胸の張ることである。

●医学部医学科
辞職 (14・3・31)
内科学第二 講師
庄司 優(医学部講師)

眼科学 助教授
庄司 優(医学部講師)

内科学第二 講師
庄司 優(医学部講師)

衛生学 助手
庄司 優(医学部講師)

臨床検査医学 助手
庄司 優(医学部講師)

第一内科 講師
庄司 優(医学部講師)

第二内科 助手
庄司 優(医学部講師)

この四月から「大学の教育研究情勢に関する懇話会(いわゆる学長懇話会)」のメンバーの一人となり、他学部の委員も交え毎月に二回、学長室で自由な議論に加えさせていただいている。問題はいくらでもあるといふ感じである。全国的に学生の意欲や学力の低下が叫ばれて久しいが、もしそれが事実ならその対応は急務である。一方、問題は教官の側にも全く無いとは言えまい。昨年度から医学科で導入した「教員任期制」や「学生による教育評価」は教官の意識改革を促し、よりよい教育を行なうためのものであろう。このような制度を全国に先駆けて実施したこととは胸の張ることである。

●医学部医学科
辞職 (14・3・31)
内科学第二 講師
石坂 浩(医学部助手)

眼科学 助手
石坂 浩(医学部助手)

内科学第二 講師
石坂 浩(医学部助手)

衛生学 助手
石坂 浩(医学部助手)

臨床検査医学 助手
石坂 浩(医学部助手)

第一内科 講師
石坂 浩(医学部助手)

第二内科 助手
石坂 浩(医学部助手)

この四月から「大学の教育研究情勢に関する懇話会(いわゆる学長懇話会)」のメンバーの一人となり、他学部の委員も交え毎月に二回、学長室で自由な議論に加えさせていただいている。問題はいくらでもあるといふ感じである。全国的に学生の意欲や学力の低下が叫ばれて久しいが、もしそれが事実ならその対応は急務である。一方、問題は教官の側にも全く無いとは言えまい。昨年度から医学科で導入した「教員任期制」や「学生による教育評価」は教官の意識改革を促し、よりよい教育を行なうためのものであろう。このような制度を全国に先駆けて実施したこととは胸の張ることである。

●医学部医学科
辞職 (14・3・31)
内科学第二 講師
転任 (14・4・1)

眼科学 助手
転任 (14・4・1)

内科学第二 講師
転任 (14・4・1)

衛生学 助手
転任 (14・4・1)

臨床検査医学 助手
転任 (14・4・1)

第一内科 講師
転任 (14・4・1)

第二内科 講師
転任 (14・4・1)

この四月から「大学の教育研究情勢に関する懇話会(いわゆる学長懇話会)」のメンバーの一人となり、他学部の委員も交え毎月に二回、学長室で自由な議論に加えさせていただいている。問題はいくらでもあるといふ感じである。全国的に学生の意欲や学力の低下が叫ばれて久しいが、もしそれが事実ならその対応は急務である。一方、問題は教官の側にも全く無いとは言えまい。昨年度から医学科で導入した「教員任期制」や「学生による教育評価」は教官の意識改革を促し、よりよい教育を行なうためのものであろう。このような制度を全国に先駆けて実施したこととは胸の張ることである。

●医学部医学科
辞職 (14・3・31)
内科学第二 講師
辯用 (14・4・1)

眼科学 助手
辯用 (14・4・1)

内科学第二 講師
辯用 (14・4・1)

衛生学 助手
辯用 (14・4・1)

臨床検査医学 助手
辯用 (14・4・1)

第一内科 講師
辯用 (14・4・1)

第二内科 講師
辯用 (14・4・1)

この四月から「大学の教育研究情勢に関する懇話会(いわゆる学長懇話会)」のメンバーの一人となり、他学部の委員も交え毎月に二回、学長室で自由な議論に加えさせていただいている。問題はいくらでもあるといふ感じである。全国的に学生の意欲や学力の低下が叫ばれて久しいが、もしそれが事実ならその対応は急務である。一方、問題は教官の側にも全く無いとは言えまい。昨年度から医学科で導入した「教員任期制」や「学生による教育評価」は教官の意識改革を促し、よりよい教育を行なうためのものであろう。このような制度を全国に先駆けて実施したこととは胸の張ることである。

●医学部医学科
辞職 (14・3・31)
内科学第二 講師
辯用 (14・4・1)

眼科学 助手
辯用 (14・4・1)

内科学第二 講師
辯用 (14・4・1)

衛生学 助手
辯用 (14・4・1)

臨床検査医学 助手
辯用 (14・4・1)

第一内科 講師
辯用 (14・4・1)

第二内科 講師
辯用 (14・4・1)

この四月から「大学の教育研究情勢に関する懇話会(いわゆる学長懇話会)」のメンバーの一人となり、他学部の委員も交え毎月に二回、学長室で自由な議論に加えさせていただいている。問題はいくらでもあるといふ感じである。全国的に学生の意欲や学力の低下が叫ばれて久しいが、もしそれが事実ならその対応は急務である。一方、問題は教官の側にも全く無いとは言えまい。昨年度から医学科で導入した「教員任期制」や「学生による教育評価」は教官の意識改革を促し、よりよい教育を行なうためのものであろう。このような制度を全国に先駆けて実施したこととは胸の張ることである。

●医学部医学科
辞職 (14・3・31)
内科学第二 講師
辯用 (14・4・1)

眼科学 助手
辯用 (14・4・1)

内科学第二 講師
辯用 (14・4・1)